

The Whisper from Amherst

～エミリオのささやき～

作者不在の今となつてはその解釈が読者に委ねられているエミリオの詩ですが、特に物議を醸し出すのが恋愛関係です。伝説的な批評家たちは、とかくエミリオを失恋によって絶望的になった女性とか、一生を尼僧のようにひそかに過ごした人物のように短絡的に考えたりもします。しかし、内にひめていたものは熱く激しい感情であったことを数々の詩が証明しています。

マイ ライフ ヘドウ ストワードゥ ア ロウディドゥ ガン
 ‘My Life had stood-a Loaded Gun-’

My Life had stood-a Loaded Gun- わたしの一生は ずっと装填された銃だった

イン コーナーズ ティル ア デイ
 In Corners-till a Day 隅に置かれたまま ある日

デイ オーナー パストゥ アイデンティファイドゥ
 The Owner passed-identified- 持ち主が通りかかり わたしを認めて

アンドゥ キャウリドゥ ミー アウエイ
 And carried Me away- 持ち去った

エン ナウ ウィ ロウム イン サーヴェウレン ウーッズ
 And now We roam in Sovereign Woods-そして今一緒に主人の森をさまよい

エン ナウ ウィ ハントゥ ザ ドゥ
 And now We hunt the Doe- 一緒に牝鹿を狩る

エン エヴウリ タイム アイ スピーク フォー ヒム
 And every time I speak for Him- わたしが彼のために語るたびに

ザ マウンテンズ ストレイトゥ リプライ
 The Mountains straight reply- 四方の山々がたちまち答えてくれる

エン ドゥ アイ スマイル サ チ カージャル ライトゥ
 And do I smile, such cordial light わたしがほほえむと 歓迎の光が

アボン ザ ヴァリー グロウ
Upon the Valley glow-

谷いちめん^に照りかがやく

イトウ イズ アズ ア ヴェスーヴィアン フェイス
It is as a Vesuvian face

まるでヴェスヴィオ火山の顔が

ヘドゥ レトゥ イツ プレジャー ソ ウ
Had let it's pleasure through-

喜びをあらわしたように

エン ウェン アトゥ ナイトゥ アワ グーッ デイ ダン
And when at Night-Our good Day done-

そして夜には

楽しい1日が終わって

アイ ガードゥ マイ マスターズ ヘッドゥ
I guard My Master's Head-

わたしは主人の頭を守る

ティズ ベター ザン ザ アイダー ダックス
'Tis better than the Eider-Duck's

綿毛のふかぶかした枕に

ディープ ピロウ トゥ ヘ ヴ シェアードゥ
Deep Pillow-to have shared-

ともに休むよりずっとまだ

トゥ フォー オヴ ヒズ アイム デドゥリー フォー
To foe of His-I'm deadly foe-

彼の敵には わたしはおそるべき敵

ナン sティア ザ セカンドゥ タイム
None stir the second time-

わたしが黄色い目を定めたり

オン フーム アイ レイ ア イェロウ アイ
On whom I lay a Yellow Eye-

勇ましい指を置く相手は

オーア アン エンファティック サ ム
Or an emphatic Thumb-

二度と起き上がれない

ゾ ウ アイ ザン ヒー メイ ロンガー リヴ
Though I than He-may longer live

わたしが彼より長生きするかもしれないが

ヒー ロンガー マストゥ ザン ナイ
He longer must-than I-

やはり彼の方がわたしより長生きすべきだ

フォー アイ ヘ ヴ バトゥ ザ パワー トゥ キル
For I have but the power to kill,

わたしは殺す力だけで

ウィザウトゥ ザ パワー トゥ ダイ
Without-the power to die-

死ぬ力をもたないから

(大修館書店「エミリー・ディキンソン 不在の肖像」新倉 俊一 より)

これは、エミリエが自己を解体したい、自己を放棄したいという欲求、あるいは自己を解体させる不可抗的な要素が自己の中に潜んでいることを認め、解体や放棄を強く望んでいるように感じさせる詩

のひとつです。1862年8月、エミリエは当時慕っていた批評家^{トーマス ウェントウワース ヒギンソン}のThomas Wentworth Higginsonに

手紙を書き、「私の生活には専制君主がいませんので、自分を支配できないのです(letter 271)」と告白しています。そのエミリエを、Higginson は後に「彼女の側には、自分の手に負えない人生の問題を解決するために私に助けをもらいたいという、漠然とした期待があったようだ」と漏らしています。

これ以降、エミリエの作品は自己解体のジレンマを象徴するものがほとんどであると言っている評論家もいます。この詩の中にも、エミリエがよく自己破壊的なイメージに用いる「火山」が登場します。わたしは、自己破壊というよりは殻を破りたいというエミリエの溢れんばかりの感情がほとばしる詩だと思います。

狩猟はエミリエが生まれる何世紀も前から男性の大切な仕事であり、趣味でもありました。ヨーロッパの貴族の館には、狩猟用の衣服をまとった男性の肖像画が数えきれないほどありますし、今では動物愛護団体の標的となっている「キツネ狩り」も伝統的なスポーツです。銃になりすましたエミリエが好きな男性と楽しい1日を過ごし、その男性と眠りにつく、そんなエミリエの乙女心も見え隠れする作品と解釈するか、宮部みゆきの長編小説「クロスファイア」で自らを装填された銃と称し、超能力を駆使して悪と戦う主人公、青木淳子と重ね合わせるのか、それは読者の自己の解体、解放の欲求に委ねたいと思います。前回に引き続き、1863年頃、33歳のときの作品です。

Nellie's Mom



ブリューゲル「雪中の狩人」(1565)



狩猟姿の肖像画



キツネ狩り